

人と自然のかかわりを基盤とした海岸林の再生を考  
える——2012年に大学院を中退した私が、「再入学  
」で得たもの——

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-08-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 東, 聖史 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24888">https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24888</a>

# 人と自然のかかわりを基盤とした海岸林の再生を考える —2012年に大学院を中退した私が、「再入学」で得たもの—

東北学院大学大学院 人間情報学研究科 人間情報学専攻  
博士前期課程2年 東 聖史

## 1. はじめに

東日本大震災の発生から、早11年。当時地域構想学科の4年生だった私は、人間情報学研究科へ進学後、卒論の続きとして「蒲生干潟をフィールドとしたESD・環境教育」をテーマに研究を行う予定であった。しかし、震災によってその計画は脆くも崩れ去り、また、私自身も「自然保護が何だ」「環境教育が何だ」と、研究に対するモチベーションを完全に失ってしまった。大学院には“一応”進んだものの、失った研究意欲をそう簡単に取り戻せるはずもなく、翌年の4月に退学届を提出するに至った。

その後、趣味の延長としての単身韓国語学留学や帰国後のアルバイト生活等を経て、2018年4月、宮城県亶理町で震災によって失われた海岸林の再生に取り組むNPO法人わたりグリーンベルトプロジェクト（以下、わたりGBP）に縁あって就職。震災以降距離を置いていた沿岸域の自然と再びかかわることになったのである。わたりGBPとの出会いは、私にとって、海辺の自然環境が有する様々な魅力や価値を再発見する大きなきっかけとなった。そして次第に、法人の活動をとおして得られた様々な気づきをテーマとして、「今の自分なら修士論文が書ける」と感じるようになっていった。

本稿は、2021年4月の「再入学」から始まった9年振りの学生生活を振り返りながら、この一年の主な研究活動について報告するものである。なお、各活動の詳細やわたりGBPの実績等については、「修士論文」ない

し東北学院大学人間情報学研究所紀要『人間情報学研究 第27巻』に投稿した研究ノート「津波被災地の歴史と生物多様性に着目した自然観察プログラムの開発と実践」（印刷中）を参照されたい。

## 2. 研究テーマ

2011年の東北地方太平洋沖地震とそれに伴う津波によって甚大な被害を受けた仙台湾沿岸の海岸林では、震災以降、基盤盛土の造成やクロマツの植栽を中心とした林帯再生が急速に進められてきた。一方で、今後の継続的な管理や利活用を見据えた「人と海岸林のかかわりの再構築」（岡、2018）が大きな課題となっている。さらに、浅海、砂浜、防潮堤、海岸林、湿地、水路、農地等からなる、人と自然のかかわりを基盤として成立した砂浜海岸エコトーン（平吹ほか、2011）全体を見渡す視点が、これからの森づくり・地域づくりには強く求められる。

私は、修士論文のテーマを「仙台湾南部沿岸地域の海岸林再生活動に軸足を置いた自然観察イベントの意義と効果」とし、亶理町における海岸林の歴史や再生活動の進捗と課題、多種多様な動植物の暮らし等に関する情報を法人内外の人々と共有するための自然観察イベントを、わたりGBPスタッフとして企画・実施した。そしてそれを、近年国際社会を中心に注目を集めているNature-based Solutions（自然を基盤とした解決策）の視点から評価することを試みた。

### 3. 2021 年度に実施した主な活動

#### 3-1 わたり GBP「自然観察会」

研究の中心となる実践的活動として、2021年6月・8月・10月に、それぞれ春・夏・秋の「自然観察会」を実施した。わたり GBP の植樹地や、復旧事業による伐採を免れた残存林、震災後にできた湿地、巨大な防潮堤を越えた先に広がる砂浜等を歩きながら、これから先の地域づくりの基盤となる今ある「自然」の姿を、各回およそ2時間かけて観察した(図1~3)。なお、すべての回において、企画担当者である私が案内役を務めている。

参加者の大半は、わたり GBP スタッフやその家族・知人等で、参加人数は平均17人であった。新型コロナ禍にも配慮し、無理に人数を増やそうとしなかったという背景はあるが、より広く一般市民の参加を得ることが今後の課題と言えよう。

計3回の実践をとおして多くの参加者から聞かれたのは、多種多様な動植物の存在に対する「驚き」や、自然の高い回復力を目の当たりにした「感動」、そして、自然観察会そのものが「楽しかった」という声であり、観察会に参加した人々の海岸林に対するイメージの変化がうかがえた。このことは、わたり GBP の関係者にとっても、海岸林再生事業地を含む沿岸域の自然が、これまでいかに近くて遠い存在となっていたかを如実に表していると言えるだろう。

本実践は、「地域の自然を知り、地域の自然に学ぶ」活動を通じて、沿岸域における「人と自然のかかわりの再構築」およびその実現に向けた知識・情報共有を図ることが主な目的であった。参加者の多くが、海岸林をはじめとする沿岸環境と直接触れ合い、その見方を新たにすることは、実践の成果として高く評価できる。今後、こうした活動を地道に継続しながら、一つひとつの成果を、持続可能な森づくり・地域づくりにどう活かしていくかが重要な課題である。



図1 植樹地の観察 (2021年6月13日)



図2 湿地の観察 (2021年6月13日)



図3 砂浜の観察 (2021年6月13日)

#### 3-2 学会発表

新型コロナ禍のためいずれもオンライン形式であったが、2つの学会で口頭発表を行うことができた。9月4日には日本景観生態学会信州大会にて、また、10月23日には日本海岸林学会宮城大会にて、2020年の春にわたり GBP 植樹地で実施した「植栽木等生育状況調査」の結果報告等を行った。

画一的な盛土造成を伴う海岸林再生や巨大防潮堤の建設に関しては、地域の景観や生物多様性を大きく損なうものであるとして各方面から強い懸念が示されてきた(西廣ほか、2014)。しかし、画一的に造成された盛

土が、必ずしも完全に均一な環境を作り出したわけではない。盛土材の性質や周辺環境の影響、樹種構成の違い等によって、わたり GBP 植樹地では比較的不均質な景観が形成されつつある。今後、各エリアの状況に応じた管理および利活用を進めていくことが求められるが、先の調査によって、植栽した広葉樹の生存率や自然発生した樹木の分布等が明らかとなった意義は大きい。

各大会の参加者からは、継続的な調査の実施や、調査結果を活かした海岸林管理への強い期待が示された。わたり GBP 職員として 2020 年に実施した調査活動の成果を、学会という場で発表する機会が得られたことは、一学生としても、同法人スタッフとしても非常に有意義であった。

### 3-3 修士論文の執筆

2021 年 4 月に博士前期課程の 2 年生として再入学したため、私は実質約 9 ヶ月で修士論文を執筆しなければならなかった。一度退職して学業に専念することにしたとは言え、9 年間も大学を離れていた私にとって、それは実に大きな挑戦であった。しかし、わたり GBP 職員として過ごした 3 年間の経験が論考の基盤となり、研究を進める上での助けとなったことは間違いない。

卒業論文では、「小学校における ESD・環境教育」を研究の主な視点と位置づけたが、修士論文においては、IUCN（国際自然保護連合）や EC（欧州委員会）が提唱する新たな概念「Nature-based Solutions」（以下、NbS）に着目した。東日本大震災以降進められてきた各種復旧事業や、わたり GBP の森づくり活動、そして先述した「自然観察会」といった取り組みを NbS の概念に照らすことで、それぞれの価値や課題、持続可能性等に関する評価・検討を試みた。

また、その前段階として、亘理町における海岸林の歴史（空間的変化、里山的利用等）

を、各種史料・航空写真等の読み解きや地域住民への聞き取りをとおして整理した。特に聞き取り調査では、「海岸林が人の暮らしを支え、人の暮らしが海岸林を支える」という海岸林存続の条件が成立していた時代の沿岸域の姿を垣間見ることができた。

NbS、すなわち「自然を基盤とした解決策」という考え方は、人間たる者、本来であれば当たり前を持つべき価値観と言えよう。それをあえて新しい概念として浸透させなければならぬ社会の現状には憂慮を隠しきれないが、今後、自然の持つ力や生態系サービスを基盤とした社会課題解決の視点を主流化していくことは喫緊の課題である。同時に、未だ発展途上と言わざるを得ない「NbS」という概念の解釈や適用の基準についても、今後さらなる検討が求められる。

余談にはなるが、学部生時代の楽しかった思い出を問われると、私はいつも「卒論」と答えている。他にも思い出はあるものの、一番はやはり卒論であった。一方、修士論文の執筆について、今後単に「楽しかった」と表現することはおそらくないだろう。ただ、執筆の過程で得た多くの学びが、今後の私自身を支える大きな力になると信じている。

## 4. 9 年振りの学生生活

振り返れば、私が人間情報学研究科への再入学を決意したのは、2019 年の秋であった。当時は、賑やかで張り合いに満ちたキャンパスライフを想像（期待）していたが、まもなく訪れた新型コロナ禍によって、実際の学生生活は想定とかなり異なるものとなった。

それでも、学生として過ごす日々の中で、私は多くの刺激を得ることができた。本稿に記したような活動はもちろんのこと、履修科目を通じた学びや、年齢が一回りほど離れたゼミ生たちとの交流、TA（ティーチングアシスタント）として得た経験等、その一つひとつが貴重な財産となった。特に、地域構想学

科の1~2年生とのかかわりをとおして改めて感じたのは、2007年入学時からの同学科での学びが、間違いなく現在の自分を形づくっているということである。決して大袈裟ではなく、極めて純粋に「地域構想学科に入っ  
てよかった」、そして「再入学して(帰ってきて)よかった」と、事あるごとに感じる一年であった。

30代になって再度経験した学生生活を、今回は中退ではなく「卒業」という形で終わられることを大変嬉しく思う。この一年で痛感したが、やはり、学生という立場は特別である。新型コロナ禍が一日も早く終息し、現役生が安心して充実した学生生活を送れるようになることを心から願っている。

## 5. おわりに

地域構想学科の一分野にもなっている「人と自然のかかわり」は、まさに人間生活の基盤に他ならない。東日本大震災以降、折に触れて自然の脅威ばかりが取り沙汰されるが、教育の視点から、「国内で頻繁に生じる自然災害の発生は、豊かな自然環境の裏返しと考えることができ、日本文化の骨格をつくってきたことも取り上げる意義がある」という藤岡(2015)の指摘は極めて重要である。所謂SDGsの達成、すなわち持続可能な未来づくりを実現するためには、私たち人間が今後基盤とすべき「自然」を正しく理解することが何よりも重要ではないだろうか。

被災した海岸林の再生も、そのように「自然を基盤とした」視点に基づいて進めていくことが求められる。わたりGBPの「自然観察会」や「植栽木等生育状況調査」は、これから先の森づくり・地域づくりを持続可能なものとするための取り組みとして、非常に高い価値と可能性を有していると言えよう。

なお、私は今後もわたりGBPの一員として、今ある「自然」を基盤とした持続可能な森づくりの実現、および沿岸地域のにぎわい

再生に尽力していく所存である。

## 謝辞

大学院中退から10年。「修士号という忘れ物を取りに行く」という私の決断を後押しし、また応援してくださったすべての方々から感謝申し上げます。限られた期間内での論文執筆には不安もありましたが、指導教員の先生方をはじめとする多くの先生のお力添えや、頼もしい後輩たちの存在、あたたかい家族の支えがあったからこそ成し遂げられたものと確信しています。そして、私の再入学に係る様々な手続きや個別面談等に快く応じてくださった人間情報学研究科の先生方、元大学院担当の佐藤壮様をはじめとする泉キャンパス学務系の皆様に心より御礼申し上げます。本当に、本当にありがとうございました。

## 引用文献

- 藤岡達也. 2015. ポスト UNDES(国連持続可能な開発のための教育の10年)における防災教育—日本型環境教育構築の一つの観点として—. 環境教育 24(3). pp.40-47.
- 東聖史. (印刷中). 研究ノート 津波被災地の歴史と生物多様性に着目した自然観察プログラムの開発と実践. 人間情報学研究 27.
- 平吹喜彦・富田瑞樹・菅野洋・原慶太郎. 2011. 東日本大震災・大津波で被災した仙台湾砂浜海岸エコトーンとその植生状況. 薬用植物研究 33(2). pp.45-57.
- 西廣淳・原慶太郎・平吹喜彦. 2014. 大規模災害からの復興事業と生物多様性保全: 仙台湾南部海岸域の教訓. 保全生態学研究 19. pp.221-226.
- 岡浩平. 2018. 海岸林・沿岸域緑化研究部会のこれから. 日本緑化工学会誌 44(2). pp.293-295.